

vol. 13

京都大学
白眉センターだより



THE HAKUBI CENTER NEWSLETTER

2 巻頭エッセイ

堀智孝

「白眉の内と外 - 初春を寿ぎながら -」

3-8 シリーズ白眉対談⑫

「モノを通して過去を読む」

——武内康則／荻原裕敏／岩尾一史／金 宇大

8 海外渡航記——米田英嗣

9-11 研究の現場から——西本希呼／鈴木咲衣／今吉 格

12-13 白眉研究ピックアップ——鈴木智子／倉重佑輝／川中宣太

13-16 活動紹介——金 政秀／林 眞理／鳥澤勇介

17-18 ポスト白眉の日常——江間有沙／江波進一／佐藤 弥

YUMEKUSA エッセイ

安藤裕一郎「サーフィンと研究の意外な共通点」

19 お知らせ——受賞・報道／メディア掲載記事／書籍

20 センター日誌



白眉の内と外 - 初春を寿ぎながら -

白眉センター プログラムマネージャー 堀 智孝

いま、年頭に届いた賀状を読み返し、友人知人の息災を確認しながら、我が身のこの一年を占っている。

年齢70。高齢者の線引きが65から75に変わりそうなので、再び常齢者に戻して貰えるが、左膝にチクチクと痛みがあって、余り華やいだ気分にはなれない。こんな中でも、白眉研究者諸氏と接していると、往年の話術や術術が覚醒し、不思議と若返った気分になる。

京都大学が新しいプロジェクトを設置して、これまでと違った形で若手研究者の支援と育成に本腰を入れて8年が経った。その成果がいまから世に問われることになるが、評価の高低は別として、古くから“十年の計は木を植えるにしくはなく、百年の計は人を育てるにしくはなし”と言われるので、人材育成プロジェクトに異を唱える人は居ないだろう。ただ、木や森と違って人の育ちは目に見えないので、誰がどのように育てて行くのか、診るのは至難である。多分、“百年の計”と言っているのは、気短かに診たり計ったりせずに、傍からその成長を丁寧に感じよと、教えているのかも知れない。

このプロジェクトで採用された特定教員、いわゆる“白眉”と称される研究者はこの7年間で125名、私は恵まれた立場にあって、マネージャーとしてこの全員と、ときには濃く淡く、またときには辛く甘く、流れに任せて接することができた。いまこの流れを顧みるに、白眉が予約無しで飛び込んでくるのが楽しかった。なぜか。

白眉は、次の予定や約束が入るまでのひととき、気分転換を兼ねて歓談を求めて、よくやって来た。その訪問には一つのパターンがあって、対話の切り出しに「一番」とか「最も」とかを上手に使ってくる。“最近「一番」気に入っているもの”とか“これまでの人生で「最も」影響を受けたもの”を問うてくる。人生の終盤を迎えつつあるこの老マネージャーから、生涯で「一番」とか「最高」とかなるものを聞き出して、人生の色づけに使いたいとの目論見があるかも知れないが、この問いかけはある種の挑発に繋がっていて、不用意にこれに乗せられた。しかたなく我が人生をあれこれ振り返り、選択に選択を重ねてその中から一番とか最もとかを探し出して答えると、そのあと必ずといっていいくらいに「どうしてそれを選んだのか」と問いかげられる。軽々に答えて酷い目に遭

うことも多かった。

あるとき、“ほり先生！ お酒を好まれると聞いていますが、どの飲み物が一番の気に入りますか”と白眉の一人が問うてきた。取りあえずは、映画「ローマの休日」の終幕部分を思い出し、王女を演じたオードリー・ヘップバーン気取りで“いずれの飲み物もみなそれぞれに”と答えて急場を凌いだ。その日の会話はここで時間切れとなったが、次の、またいつか必ず向けられる筈の攻撃に備えて、酒の効用を準備することにした。堅く言えば飲酒の文化論、平たく言えば呑兵衛のいいわけである。

“酒を少し口含むと、たとえ粗末な食べ物でも旨くなるし、食べ物が旨くなると会話が弾み、会話の弾みは文化の発展を刺激する”と。これくらいで納得する敵ではないので、一層防備を堅くして、“なぜ文化を発展させる必要があるのか”の問いを奇想して、その続き考えた。つまり、“人間には二つの競争があって、その一つは生きとしいけるものに共通の「生存競争」、他の一つは人間だけが持ち合せていて、昨日の自分を超越するという「人間存在論的競争」だ。後者の競争こそが文化に絡んでいて、これによって人間は人間になるし、狸は何年経っても狸のままだ”と。予期した攻撃が無かったので、一昨年正月、この文化(小)論を年賀状に記して友人知人に配った(異論が多かったが)。思うに白眉諸氏は、外目には生存競争の強者であって周りを凌いでいるかに見えるが、実のところ彼らは昨日の自分と競争していて、この競争が当人も周りをも退屈させない、この点に白眉の技があるらしい。違うかなあ。

“これまでで「最も」気に入った言葉はなんですか”と問われることも多かった。あるときは、パスカルの名言を引き合いに出して、難を逃れた。パスカル曰く「君にとって以前は不可能と思われていた、この自然の事実が、君の知らない事実がまだほかにもありうるということを、君に知らせるといい。(略)自分には知るべきことが無限に残っているという結論を、引き出さなければいけないのだ。」(『世界の名著24 パスカル』前田・由木訳、中央公論社)。

予期した通りに、白眉は問うてきた、“なぜこれを選んだのか”と。この年寄り、老獪さをにじませて“これで終わりと結論を得たら明日から退屈だからねえ”と。

自然を問う理系、人間を問う文系。白眉集団をその専門分野から文理2系に分割するのは簡単だ。しかし、自然が人間を創りだし、その人間が今度は、思想の中で、新しい自然を育てていく。人間と自然の多次元的な入れ子構造である。白眉諸氏がこの仕組みの奥深さに臆することなく、ある意味では人生を賭して、仲間と一緒に苦労している。こんな人達と日々を過ごしていたので、ふと気が付いたら自分の歳を忘れていた。

白眉は、内側からみるとこんな風になりますが、外側からは如何でしょうか。機会を作って、また議論させて下さい。どうぞ、本誌13号をご覧ください。彼らの労作です。

(ほり としたか)



老人と白眉

シリーズ白眉対談⑫ 司会・編集：ニューズレター編集部

「モノを通して過去を読む」

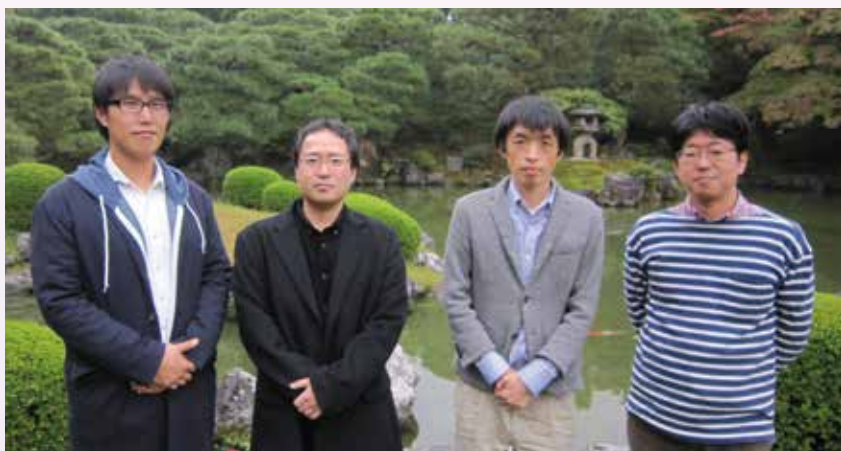
登場人物と研究課題

武内 康則 特定助教『契丹学の構築：契丹の言語・歴史・文化の新しい研究パラダイム』

荻原 裕敏 特定准教授『中央アジア地域における弥勒信仰の受容とその展開』

岩尾 一史 特定准教授『7-13世紀の東部ユーラシアにおける国際秩序と外交』

金 宇大 特定助教『古墳時代における朝鮮半島交渉の実態解明と社会発展過程の再構築』



左から金氏、荻原氏、武内氏、岩尾氏

自己紹介

(司会) 今日は一ときわ地味な(笑) 研究をしている皆さんに語り合っていたたく予定です。まずは自己紹介からお願いいたします。

(武内) 5期の武内康則です。専門分野で言うと歴史言語学になります。特に北中国で10世紀から12世紀頃に使用されていた契丹文字の研究をしています。

(荻原) 6期の荻原裕敏と申します。私の専門は、同じく歴史言語学です。現在の新疆ウイグル自治区のクチャを中心に、5世紀から11世紀頃まで使用されていた、印欧語族のトカラ語という言語を文献学的に研究しています。

(岩尾) 7期の岩尾一史です。専門は歴史学ですね。いわゆる敦煌文書などの出土文書を使って、特にチベットの歴史をやっています。

(金) 7期の金宇大です。専門は考古学で、古墳時代の日韓交流を、主にお墓から出土する副葬品の分析を通じて研究しています。

モノと研究とのかかわり

(司会) ありがとうございます。では次に、皆さんが扱っているモノと、研究とのかかわりについて、お願いいたします。

(岩尾) 僕らの分野は、テキストを読むだけではなくて、モノの「手ざわり」というのが重要で、極端に言えば、偽物が本物かも「手ざわり」でわかるようなことがあると思いますね。

(荻原) トカラ語文書のばあい、ドイツが一番多いんですけども、ガラスのプレートに入っていて、触れないんですよ(笑)。フランスのものは、二つ折りにされた紙に入っているの、触れるんですけども、小さくて、触ると欠けたりするので、あまり触らないでほしいと言われる。

(武内) 契丹文字の場合、中国遼寧省や内蒙古の石刻資料を用いることが多いです。拓本の写真をよく使うんですけども、どうしても文字が読めないことがありますから、現地での原石調査が必要で、博物館とかに行くことがありますね。

(荻原) 拓本はいつなされたものなんですか。最近ですか。

(武内) 最近です。原石の場所がわからなくなって、拓本だけが存在しているという資料もあります。

(金) 考古学は、土器とか金属器を観察しながら製作方法を比較して、技術変化の様相を見たりします。もし、何らかの歴史的な事件と変化のタイミングが一致していたら、技術革新が生じたきっかけになったのではないかと、そういうアプローチをしています。

(荻原) 原材料の場所はわかるんですか。

(金) 難しいですね。今ある産地が昔もあったかはわからないし、今ではわからない産地が昔あったかもしれない。例えば、新羅のお墓から金が出てくるんです。これまではどこから採れた金かわからなかった。ところが、砂金かとれるんじゃないかという研究があっ

たりもして。

(岩尾) 僕らも似ていて、写本の紙が問題になる。敦煌文書の中でも、チベット産や敦煌産の紙は感じが違います。で、チベットの紙でないのにチベット文字が書いてあったりすると、これ何なんだったってことになる。

(金) いわゆる「手ざわり」っていうのは、本当に紙の質とかを確認していく手法ということなのでしょうか。

(岩尾) そうですね。ただ、僕たちは手ざわりとか、厚さとか、漉き跡とか、その程度のレベル。最近は理科系の人が入ってきて、成分分析してるんですよ。僕らがやってるのは、本当に雑な読み方(笑)。考古学では、理科系の人の分析とかもあるわけでしょう？

(金) もちろんです。例えば土器なら、どこの土かは顕微鏡でもわかるんです。でも、鉄や金になると、成分分析して、含まれる微量元素を根拠に産地を探したりします。

(岩尾) 具体的にはどうしてるんですか。掘り屋さんがいて、掘ってくる。で、分析屋さんが別において、それは考古学の分野なんですか。

(金) 分析屋さんが別にいるというか、文化財科学という分野があります。そこには文系の考古学出身者もいますけど、理系の科学的的方法論で最初からやってる人もいます。

(荻原) 壁画の分析が似てるでしょ？ テーマの分析以外にも、どういう顔料を使うかという。写本だと、ある資料を調べてる時に、人工的な切断箇所が

あって、カーボン14（放射性炭素年代測定）やってるんですよ。ああ、ちょっとなあっていうのはありますよ。

（岩尾）雑だよな、文書の扱って。欧州の某図書館だとある文書が出てこなくて、迷子になってたという、そういうアナログなことがある（笑）。

（金）考古学、モノ見つからない、しょっちゅうですよ。

（岩尾）しょっちゅう？

（金）はい（笑）。土器とかの破片がコンテナ何十箱分と出土するんですけど、その中で「報告されてるこの破片を出してくれ」と言われた時、探すのが大変で。

（岩尾）拓本じゃ、そんなことないか。

（武内）博物館所蔵の資料に、片面漢字、片面契丹文字の墓誌があるんですね。でも、漢字のほうが需要があるから、契丹面は壁にくっつけていて実見調査できないというものがあつたりするんですね。

（岩尾）野ざらして、モノとしてポロポロになったものもあるんじゃないですか。

（武内）ありますね。昔とった拓本が何か使えるかどうかですね。

（岩尾）拓本がモノよりもいい場合があるというのはそうですね。チベットでも、ラサのど真ん中に唐蕃会盟碑という有名な碑文があって、18世紀に採られた拓本が一番古い。この拓本は、今は京大人文研にあります。で、今本物を見ても、ほとんど削れちゃってる。

（金）考古学は、特に鉄とかだと、どんどん錆びて崩壊していっちゃうんですね。戦前の白黒写真では鮮明なのに、現物はもう見るも無残ということがよくありますね。

（岩尾）それって、管理はどうしてるの？資料館ごとに違う？

（金）資料館ごとに全然違います。本当は温度や湿度を一定にして管理すべきですけど、すべての所でできているわけではないですね。

（荻原）私は、壁に書かれた当時の落書きを読むことがあるんだけど、現地でも100年ぐらい前にヨーロッパの探検隊が撮った写真が一番いいんですよ。今現場で見ると、もう壁が崩落してたり、あとから人が上書きしてたりして。

（岩尾）敦煌莫高窟でも修復のときにコンクリート入れたりして、落書きがなくなっちゃうことがある。

（荻原）だから、できるだけ早い時に写

真とるなり記録とるなりしていくべきなんだけど。

（岩尾）文献学ではデジタル化してからの公開が進んでいるけど。考古学はどう？

（金）デジタル化で公開なんて、ほとんどされてないですね。どうしても自分で見たいんですね、それぞれが。

（荻原）わかりますね。

（金）報告した人は、出せる情報を全部出したつもりでも、あとで研究する人は、見たいところが全然違うんです。でも、例えば史跡に指定されて、重要文化財とか国宝とかになると、自分で手にとって見るのは困難になります。そうすると、もとは学術調査で見つかったものであっても、学術的には利用が難しくなってる。

（荻原）骨董品化するのですね。

（金）美術品なのか学術資料なのかっていう…。

（岩尾）そうなってくると、逆の問題が出てくる。偽物問題ね。契丹なんてまさにそうじゃない？

（武内）いやあ、ひどいですよ（笑）。

（一同）（笑）

（武内）契丹の墓は副葬品が非常に高価である場合が多いので。金に契丹文字を彫ったものがオークションで出ることもあったようです。

（岩尾）オークションで出る？

（武内）幸い、契丹の偽物は、見分けるのは簡単ですね。大体どこかのわかってる資料からコピーしてるとか、その程度の質なので。

（岩尾）それはどんどん、いたちごっこになるわけでしょ？向こうがもっと本物を知るようになって、研究者と結託していくと、より精巧な偽物が（笑）。

（荻原）結託する研究者っているの？

（岩尾）いると思うよ。中央アジア出土写本は、初期はつまらないのが出てきたけど、だんだんいいのが出てきたわけだから、あり得るんじゃないかな（笑）。

（武内）確かに、本物の新しい出土資料に対して、これは偽物に違いないとか、そういうことを言う人も出てきてますね。偽物がたくさん出回りすぎて。

（岩尾）偽物と言えば、考古学（笑）。

（金）いや、同じ偽物でも、雰囲気違いますね。例えば、刀だと、骨董品として流通させるなら、完全な形の方がいいんですよ。刃と柄の部分をつぎはぎして、それぞれは本物だけど、全体としては偽物みたいなやつがあつたりし

ます。

（岩尾）その偽物、本物クラスのものでしょ？研究対象にはなる？

（金）はい。ただ、出土時の情報がないので、学術資料としては、参考資料ぐらいに落ちちゃう。

（荻原）出土時の状態とか地層とかが不明だと、意味がないことが多いよね。

（金）はい。その情報があることが重要なんで。出土情報がわかったら最高なものになあってやつが美術品として流通してたり。

（岩尾）この問題はあつよね。マーケットに出たやつの扱いが一番難しい。

（武内）契丹だと、新資料が最近たくさんあるんですけど、アンティークショップとか私立の博物館にあるのが報告されることも多いんですね。

（岩尾）チベットは、出土品らしきものが出てくる、そういうば。

（荻原）木簡？

（岩尾）木簡じゃなくて、モノ。中国から金銀器とか織物とかが出てきて、スイスやアメリカの財団が買ってたりする。すると、写真は見たことがあるけど、直接には研究ができないんですね。

（荻原）中国、今、開発激しいでしょ。開発の際に墓誌とか装飾品とかが出てきたり。

（武内）契丹は、もう90%の墓は盗掘済みだって言われているぐらい。

（金）これはひどい（笑）。

（武内）昔は、墓誌は捨て置かれることが多かったんですが、今は墓誌もお金になるので、持っていくようになってしまつて（笑）。

（岩尾）中国の機関が買つたりしないんですか。

（武内）今、買っているところがあるんですよ。だから、偽物を作る人も出てきちゃつてという感じですね。

（荻原）考古学だと、盗掘されたら、もう最後でしょ？（笑）。

（金）盗掘されたら、そうですね。文字の情報もないので、本当に本物かどうかがよくわかんなくて、使えない資料になってしまいます。

（岩尾）それは、カーボン14とかでわかんない？

（金）例えば、古墳時代の銅製品だと亜鉛が入っていないので、精巧でも亜鉛が出てきて偽物だとわかるということはある。逆に、そういう精巧なやつらがいるから怖いんですね。

（荻原）文書もそうですね。オリジナル

をコピーして、書いてある内容は本物
 だけど、文書自体は偽物という。

(岩尾) で、本物のほうは、もうなくなっ
 ちゃうとかね。

(荻原) 出版された写真をそのままス
 キャンして、汚い状態にして売り出す
 ということがあるでしょ？

(岩尾) そう、本物の紙を使って書くとか
 かね。

(荻原) 自分が出版した断片が、紙に何
 回もコピーされて、ある博物館に渡っ
 て、それから私のところに話が回って
 きて「研究できるものであれば研究し
 ても構わない」といわれて、見たら、
 「あ、自分が読んだやつや」って(笑)。
 こんな形で活用されるかと思いつなが
 りながら。
 (一同) (笑)

科学技術の進歩

(荻原) 科学技術の進歩といえば、イン
 ターネット技術の発達によって、デジ
 タル画像が簡単に見られるようになった。
 わざわざ現地で見なくてもいい。
 現地の図書館だと、一度に出してもら
 える量が限られてるんで、比較がなか
 なかできない。インターネットだと、
 画像を落とせば比較可能なんで。それ
 でもものすごくやりやすくなった。モノ
 を見ないとわからない情報っていうの
 があって。書いた人間が一緒かどうか
 とか。

(岩尾) 国際敦煌プロジェクトというの
 をイギリス中心にやあって、敦煌だけ
 じゃなくて、中央アジアのもの全部を
 対象にして、ヨーロッパでも中国のも
 のでも、同じ基準でデジタル化してい
 る。現物は見られないけど、画像で一
 気に見られる。ダウンロードもでき
 るんですよ。それをフォトショップなん
 かで合成もできる。そうすると、これ
 とこれ、違うところにあるけど…

(荻原) ひつつく？

(岩尾) ひつつくという、そういうのが、
 できるんですね。

(金) まさに今の技術じゃないと、

(荻原) そう、ローマ字で翻字されただ

けではわからない情報がいろいろある。
 読み間違いとかもわかる。昔の研究者
 が必ずしも正しく読んでとは限らな
 いので。

(岩尾) デジタル画像といえば、写真を
 加工することができる。すると、普通
 には見えないんだけど、文字が見える
 ようにできる、そういうのもあります
 ね。

(荻原) 拓本って公開されてるんですか、
 インターネット上で。

(武内) 例えば京大の人文研も、所蔵し
 てる契丹の拓本を画像で一部公開して
 るんですけど、多くのものは自分で入
 手する必要がありますね。図版とかで
 最近は割と質のいい写真とかもありま
 すけれど。

(岩尾) 拓本の本物と写真版とは、ど
 ちらが使いやすいですか。拓本はでか
 いじゃないですか。

(武内) パソコンで処理する時は、デー
 タ化されてるほうがいいです。ただ、
 手元に印刷したものがないと、落ち着
 かないですけど。

(金) アナログ化されたカードみたいな
 やつが手元にあるのは重要ですよ。

(荻原) 考古学の資料だと、画像だけあ
 っても、あまり意味ない。

(金) そうですね、結局、実際見なあか
 んという話になりますね。

(岩尾) 公開の仕方に問題があるという
 ことですか。

(金) 本当に360度、あらゆる角度か
 ら観察したいですね。裏面に製作にか
 かわる重要な痕跡があったりするん
 です。専門じゃない人がやっても、なか
 なかその裏面のこの部分の写真を報告
 書に載せようという発想が出てこない
 んです。

(岩尾) それは、けど、もともとの話に
 なるけど、どうやって経験を積むん
 ですか。

(金) たとえば鉄の出土品をX線をと
 ったレントゲン写真を見ると、鏽だけ
 の部分と、メタルが残ってるところが
 わかります。そのX線写真と実物を見

比べていくうちに、だんだん見方も
 わかってきたりします。

(岩尾) やっぱ経験則なんだ？

(金) そうですね。モノをたくさん見て、
 自分で図面を書いたりとかをずっと続
 けていく感じですね。

(岩尾) デジタル時代でも、最終的には
 アナログな方法で経験を積む必要があ
 るという。

(金) そうですね。びっくりするぐらい
 アナログでやってますよ。

(岩尾) 手で描くんですか、こう。

(金) 手です。方眼紙の上にモノを設置
 して、定規の類で測り込みながら、鉛
 筆で図を描いていくんです。

(岩尾) じゃあ、絵が下手だったらダメ
 じゃないですか。

(金) そう。めっちゃ苦勞してるん
 ですよ、僕。

(一同) (笑)

(金) 実測といって、本当にリアルに写
 實的にやるべきなんですけど、あまり
 に下手で、先生にはずっと「おまえの
 実測図面は印象派だな」と言われ。

(一同) (笑)

(金) 写実派で描いてるつもりなんです
 けど。

(一同) (笑)

(金) 考古学でも拓本をとるんですけど、
 契丹の研究では現地に直接行って自分
 でとったりするんですか。

(武内) やりますね。モンゴルに自然の
 まま置いてある資料を調査した際にし
 たことがあります。拓本セット持って
 行ってやったんですけど、慣れてない
 んで、難しかったですね。

(金) 例えば瓦の研究をしている人が、
 瓦の文様を拓本にとったり、鏡の研究
 者が、鏡の裏面の文様をとったりもす
 るんですけど、僕は拓本が一番苦手
 ですね(笑)。

(岩尾) 一応練習はする？

(金) 実習で練習したりはするんです
 けど、何回やっても紙に穴があくん
 ですよ。

(岩尾) そういうメソッドの練習みたい
 なのは、われわれじゃないよね。言語学も
 歴史学も。

(荻原) ないね。まともな先生につけれ
 ば運がよくて、いろんなこと教えても
 らえるけど、実際はそうじゃないほう
 が多いんで。

(金) 先生からすれば、これはこうや
 ってやるんだ、自分で盗めぐらいの感
 じがあるんですか。



(岩尾) そう。だけど、メソッドは必要。拓本をとる技術ぐらいは、どこかで教えてほしいな(笑)。モノを扱うときのこの基本的なメソッドみたいなやつを、どこかで。

研究の現代的意義

(岩尾) いろいろ研究するとして、どのように研究テーマを決めていくかは、結局は現在のわれわれの関心と関係すると思うんだけど、どこに「出口」を探していくかは、どうですか。細かいことをやって、この先どうすんだ、これ、みたいな(笑)。ほかの分野の人と協力するとか、こういうところで喋る時に、共通の問題意識のようなものを探さなければいけないですか。みんな、どうしてるの? 荻原さんとは昔から知り合いなんだけど、でも、どうしてトカラなの?(荻原) いや、もともと私は漢訳仏典がやりたくて。

(岩尾) 全然違うやん。

(荻原) そう。中国語が専門の学部で、漢訳仏典の言語学的な研究がしたいと。そう考えてるうちに、漢訳仏典を研究するには、原典を知らないといけない。でもサンスクリットの、例えば玄奘(三蔵法師)が持ってきた原典はないでしょ。

(岩尾) ガンダーラとかには行かなかったの?

(荻原) その時はちょうどガンダーラ語の新資料が出てくる直前だったから、そこには行けなかった。調べていくと、一番わかってないのがトカラ語だったので、将来性があるとか何も考えずに興味をもって。面白いなと思ってやってるうちに、ある程度の段階になると、なぜやってる人間が少ないかわかる瞬間がくる。

(一同) (笑)

(金) 考古学だと、博物館に行って埴輪が面白い顔をしてるから埴輪やってみようかな、みたいな。それでやってるうちに問題意識がもともと先にあったみたいになってくるんですね。僕の場合は、ドラゴンクエストで出てきた「はがねのつるぎ」を研究してみようっていう感じでした。

(一同) (笑)

(岩尾) 僕はもともとインドのことをやりたかったんだけど、だんだんチベットにいて、敦煌学にいて、いつのまにかチベットからアジアをみるようになった。

(金) やってるうちに、こっちに派生したこの問題も面白いぞ、みたいになってくるんですね。

(岩尾) そうそう、まさにそれ。武内さんは決め打ち?

(武内) いや、僕は昔から不思議なものが全体的に好きなんですよね。それで大学にきて、京大言語で文献言語学というのがあった。そうこうしているうちにこうなっちゃったという感じですけど。

(岩尾) 読めないものといえば西夏文字¹、契丹文字、女真文字²もあるし、もっと西のほういけば他にもあるじゃないですか。何で契丹文字にしたんですか。

(武内) 契丹が一番読めないからですよ(笑)。

(岩尾) 女真もそこそこ読めないんじゃないですか。

(武内) 女真は辞書が出てますね。でも、女真は契丹よりも資料の数の面ではきついです。

(岩尾) じゃあ、契丹のほうはまだ先があるみたいな。

(武内) そこまで考えてなかったですけどね。

(一同) (笑)

(武内) 作業していて、ある文字について発音や意味がわかるとか、それだけで楽しいんですけど、さらに背後の言語に関する部分が何かわかったりすることがあるんですね。そういう時に、その文法現象について調べて論文を書いたりとか。

(岩尾) じゃあ、「出口」というか、現代的な意味とかはそこまで考えていない?

(武内) 技術の話にいつちいますけど、今テキストを全部電子化して検索できるようにしようとしています。これができると、研究するには非常に便利になりますし。ただ、文字自体がまだ整理されていないし、表意文字である契丹大字(きったんだいじ)だと1000文字以上文字があるので、電子化するのも大変ではあるんですけどね。どうですか、電子化して利用するというのは? チベットもあるんですね。

(岩尾) チベットは今、日本が中心になってやっていますよ。

(金) あると飛躍的に違うものですか。

(岩尾) 全然違いますね、データベースは。まさに言語学的手法で、KWIC(クウィック: keyword in contextの略)というやつですよ。単語を検索する

と文脈つきで結果がでてくる。たとえば、古いチベット語の場合、中世のチベット語と単語は同じだけど意味が上書きされてるとというのが結構あって。そういうものが、検索して文脈からわかるようになる。

(金) 今まさにデータベースがどんどん構築されているということは、そこからいろいろな分野に一気に展開していくという、まさにそのタイミングなんですかね。

(岩尾) 多分そうだと思います。特にチベットに対してはそうですね。トカラも結構やってるんだよね?

(荻原) やってますね。ただ、前提として、ちゃんと写本が読めるというのが必要だよな。

(一同) (笑)

(金) 一朝一夕にはできないということですよな。

(荻原) あと、データベースに頼りすぎってしまうのもいけない。検索結果の前後しか見ないのはダメで、文献全体として把握しないとイケない。

(岩尾) 実は中国語学もそういうところがあって。たとえば、特に伝統的なものを読むときには、儒教の経典を下敷きにしてあるテキストがある。経典をちゃんと読んでたらすぐ出典がわかるんだけど、今は全部データベース化されてるから、字句がすこしかえてあると、検索してもわからなくなる。

(荻原) バランスですよな。経験も必要だし。使えるツールがあればそれも使うべきだし。

(金) アナログな部分というのが前提になって初めてデジタルをフル活用できるということになるんですね。

(荻原) 経験が重要だと思う、自分は。

(岩尾) それをどうやって積んでいくかが問題。特に、今はどんどん論文を出さないといけない時代じゃないですか。昔みたいに3年に1回論文書いたらいいというレベルじゃないから。どうやってバランスをとるかですよな。経験を積んでないと論文を書けないんだから。(荻原) それはほら、ある文献言語の研究をするために必要な知識を蓄えてからやるか、研究しながら積んでいくかというのと似てるところがあるでしょ?

(岩尾) その辺のバランスをどうしたらいいんやろう。僕は何とか生き残って、これからダメになるかもしれんけど(笑)、とりあえずここまで来た。この次の世代からはどうするのがよいの

かなとは思う。

(荻原) 次の世代ね。そもそも次の世代を見つけないと。

(一同) (笑)

(荻原) それこそ、僕らの学問が現代的な意味でどういう価値を持ってるかという問題があるから。

(金) 社会の雰囲気も変わってきてますもんね。そんな中であえてここに飛び込んでくる人をいかにつかまえるかという話ですよ。

(荻原) 考古学、どうですか。イメージだと、どちらかというとな配の方に人気がある。

(一同) (笑)

(金) そうなんです。これ、何十年かして人気を支えていた年配の方々がお亡くなりになったら、考古学は大打撃をこうむるのではないかと。例えば発掘調査をして、調査の現地説明会というのをやるんですけど、それで呼んだら、年配の方ばかりで若者はほとんど来ないですね。それこそ何かポケモンGOみたいな感じの、

(一同) (笑)

(金) あそこに行けば必ず手に入る土器をみんなで取りに行こうぜみたいな、そういうのを誰か作ってくれないかなと思ってるんですけど。

(荻原) トカラ語は、印欧語比較言語学の一つの部門になっていて、最近英語の辞書が出版された事と、研究の全体像が把握しやすくなってきた事もあって、増えてますよね。

(岩尾) 増えてるんだ (笑)。

(荻原) ここ15年ぐらいで若い人が増えてますね。ただ、トカラ語を利用して印欧語比較言語学をやりたいということなんで、文献言語学的にはどうか。論文書くまでに一定期間修業が要るじゃないですか、文献研究って。それに耐えられるかということですよ。多分チベットも同じだと思うんですけど、モノを読んで分析できるまでになるには素養が要るでしょ。契丹なんか特に。

(武内) 契丹は今後、学術的にはですけど、盛り上がっていきそうな流れではありますけどね。

(荻原) 資料が増えているからですか。

(武内) 資料もありますし、これまで中国の研究者が一番多かったのですが、最近は欧米の研究者も入ってきたりして。歴史学の人も、以前は漢文資料だけであったのが、契丹文字の墓誌か



ら歴史を読むというのを始めてる人が出てきているので。

(荻原) 新しい段階がきつつあるという状況ですね。

(武内) そういう意味では盛り上がってきそうではあるんですけどね、学術的に。ただ、一般的に社会でどうかというところ。

(一同) (笑)

(司会) 『シュトヘル』³の中にも契丹文字が出てきませんでしたか？

(荻原) あれ、西夏じゃなかったでしたっけ？

(司会) 基本的に西夏ですけど、ちょっと出てませんでしたっけ？

(荻原) 私、読んでない (笑)。

(一同) (笑)

日本とのかかわり

(荻原) 日本とのかかわりで言うと、どうですか。日本国内に例えば拓本がどれだけあるとか。

(武内) 戦前のものばかりで、少ないですね。ただ、もう原石がなくて拓本しか伝わってないものの一つが日本にあるという噂があります。

(荻原) 日本にあるチベット語文書はどうですか。

(岩尾) 古代に限って言うと少ないですし、いわゆる出土文書に限定されますよね。日本とのかかわりというのは難しいんだよね、チベットは。

(武内) でもチベットは、チベットファンが結構いらっしゃるじゃないですか。だから、イメージとしては、いろいろ理解が得られそうなんですけど。

(岩尾) 確かに一定のチベットファンというのがいる。ただ、チベットといってもヒマラヤが好きという人たちと、中国との関係で政治的な興味で入ってくる人たち、そしてチベット仏教に興味がある人たち。みんな毛色が違う。でも僕がやってるチベットは、仏教文

化が根付く前の話だから、ちょっと違うわけですよ。だから、講演なんかで話しても「全然イメージが違った」とか「そういうことじゃなくてチベット仏教はどうですか」みたいな。

(一同) (笑)

(岩尾) トカラはどうですか。

(荻原) 難しいですね。トカラ語の内、トカラ語Bは、古代クチャ国の言語だったんだけど、古代クチャ国の出身者で一番有名なのがクマーラジーバ⁴という (笑)。でも、クマーラジーバはトカラ語の資料には出てこないんで。

(岩尾) 特に中央アジアは、その後トルコ化・イスラム化したからね。残っていないからね。

(荻原) 消滅してしまった文化って、興味を抱きにくいというのがあって。契丹もそうじゃないですか。

(武内) そうですね。耶律阿保機⁵という名前を覚えていればいいのかというところ。

(一同) (笑)

(荻原) われわれの分野だと、現代日本とのつながりといわれても、説得力を持つかたちでは表明しにくいというのが実際だと思う。

(岩尾) 僕は、たとえ今はなくなったものでも、同じような人間が生きていたということを講演とかで強調するんですよ。そうすると共感してもらえる。ある歴史学者の言によると、歴史で何が大事かというところ、共感だということですよ。600万年人類の歴史があって、文字資料が残っている歴史はもっと短いんですけど、その中でも人間の営みというのはずっと一緒だったということ共感する。だけど、違うところもある。何で違うのかというところを知るのが歴史だという話。

(金) 歴史の共感をピンポイントで提供していくことが現代とのつながりと思うんですよ。例えば、埴輪とか銅鐸のゆるキャラがいるというのも一つの

形かと思えますし。ただ、そこを逆に追及していくと、例えばナショナリズムとかに歪められてしまうので、気をつけていかないといけないかなと。

(岩尾) 過去をやるうえで、それが一番大事ですよ。

(金) 現地で歴史的な何かを明らかにしたときに、現地の人たちがそこに抱く思いと、いわゆる客観的な歴史とが、どう結びついて、どう変容するのかというのはややこしい問題だなと思えますね。

(岩尾) 確かにそれはそうですね。現在からは未来と過去が見えないから、どうしてもその時代の投影が出る。例えばチベット人が考える過去というのは完全に仏教世界なんですよ。ソツェン・ガンポ⁶という偉い王様は観音様の生まれ変わりとしてチベット人は考える。だけど、歴史家から見ると全然違うんですよ。ただ、科学としての

チベット史と、チベット人が考える仏教的なチベット史が並行していて、うまく融合されてたりする。人類が始まって600万年、氷河期が終わって何万年、このぐらいに仏教国のチベットができてという感じでつながってるんですよ。違和感なく。さっき共感という話をしたけど、このチベット人の歴史観に共感しすぎると難しくなる。

(金) そうですね、共感からさらにいきすぎてしまうと危ない。歴史的な部分にかかわってる学問の場合、とにかく何とか人の役に立たなきゃとというのは全然違う次元の悩みがあるような気がします。

(岩尾) バランスが大切だね。言語学も実はそういうところありますよね？

(武内) うーん (笑)。

(岩尾) だって、印欧語のインド・ゲルマンとか。

(武内) あればナショナリズムに利用さ

れた例ですよ。

(岩尾) 科学的に見えて、逆に使いやすいみたいな。今でもあるじゃん、日本人とチベット人、日本人と何々人。

(荻原) タミル人とか。

(一同) (笑)

(岩尾) あれは似非言語学でしょ。そういうので使いやすいといえれば使いやすいよね。

(金) 何とでも利用されますね、本当に。(岩尾) 契丹だってあり得るよね？

(武内) 一部の研究者が今のダグール人(中国・内モンゴル自治区に居住するモンゴル系民族)が契丹の後裔だと言うのですが、そのことが観光などに利用されているという話を聞いたことがありますね。

(司会) 研究は地味でも、お話は面白くて安心しました。そろそろ時間になりましたので、このあたりで。ありがとうございました。

¹ 西夏文字：中国西北部に11世紀から13世紀にかけて栄えた西夏王国の文字。京都大学文学部言語学の西田龍雄教授(1928-2012)により解読された。

² 女真文字：中国北部で12世紀から15世紀にかけて女真人によって使用された文字。

³ 「シュトヘル」：西夏文字を主題にした漫画。作者は伊藤悠。第4巻14頁に、契丹文字と女真文字も出ている。ただし、字形は間違っている。

⁴ クマラージーバ：Kumārājīva(鳩摩羅什；344-413)。西域出身でインド人を父とする中国六朝時代の仏典漢訳者。

⁵ 耶律阿保機(やりつあほき)：10世紀に中国北部で遼を建国した皇帝。

⁶ ソツェン・ガンポ：6世紀から7世紀にかけて君臨し、初めてチベットを統一するとともに、仏教を導入した王。

海外渡航記

ロンドン大学での研究生活

米田 英嗣

平成27年10月16日～平成28年10月14日まで、京都大学若手人材海外派遣事業ジョン万プログラムのご支援を受けまして、ロンドン大学ゴールドスミス校に研究滞在をしました。そこでは、Elisabeth Hill教授と共同して自閉スペクトラム症傾向を持つ発達性協調運動障害の成人を対象とした時間知覚に及ぼす共感の影響についての研究を行いました。発達性協調運動障害とは、日常生活における協調運動が、本人の年齢や知能に応じて期待されるものよりも不正確であったり、困難であるという神経発達障害(American Psychiatric Association, 2013)で、日本ではあまりなじみがありませんが、自閉スペクトラム症よりも発生数が多いといわれています。

Hill先生のラボでは、実験室で得られた知見を、教育現場に還元する方法をとっていました。たとえば、自閉スペクトラム症の児童をリクルートする際に、現地の小学校で募集し、結果を教員にフィード

バックするという体制が確立されていました。研究室の運営方法として、Hill先生は、副学長で大変忙しい立場にありながら、毎月のミーティングを重視していました。多くの研究費を獲得しており、ポストドク研究員、大学院生に対して、適切な研究テーマを与えていました。また、教員同士の共同研究もされており、チームとして研究課題に取り組む姿勢は非常に勉強になり、自分も今度ラボを持つ上での参考にしようと考えました。教育方針・人材育成方法として、神経発達障害の方々を対象にした研究を行うラボであることから、基礎的な研究が、神経発達障害を持つ児童、成人に対してどんな貢献ができるかを指導していました。研究能力だけでなく、人格的な教育もめざしている素晴らしいラボでした。実際、ラボメンバーは皆親切で、人柄も素晴らしかったです。幸いなことに、研究費が採択されましたので、Hill先生とは今後共同研究を続けていきたいと思っております。

ロンドンでは、研究だけではなく、子どもの保育園や小学校などを通じまして、地域の人との交流も楽しめました。かけがえのない貴重な機会を賜りました、白眉プロジェクトおよびジョン万プログラム、関係の皆様、心よりお礼を申し上げます。

(こめだ ひでつぐ)



手先の器用さを測る課題を行う実験室の風景

研究の現場から

フィールド言語学者の研究室とフィールドでの日常

西本 希呼

研究内容

私は言語学を専門とし、主にオーストロネシア語圏で学術調査を行っている(表1)。

マダガスカル南部(写真1)の未記述の言語の研究に従事し、やっと今一冊の本を書く準備が整った。資料のない言語を正確に記述することは、莫大な時間と予算を必要とし、地域社会の協力なしでは行えない。研究過程で新たに関心をもった課題は「文字のない社会の数の認識」。簡単に言えば、非西洋の数学であるが、根本をたどれば西洋も非西洋も同じである。数詞や計量器がなくても、人間は数を認識し自然を利用して生きている。それを解き明かすことが今後の私の研究課題の1つである。

『言語学』に関する他者の認識とギャップ

『言語学』と聞くと、『何か国語くらい話せるのですか』と問われるが、語学学習と科学としての言語学は似て非なるもの。研究の都合上、数十の言語で読み書きを必要とすることもある。しかし、言語学者は語学学習者や語学教師ではない。言語学は、常に変化する言語という自然物を対象にする科学である。生物学から方法論や用語を借りている。自然科学のスキルと知識を要とする。ちなみに、よくある質問に答えておこう。幼少から現在までに学習した言語は30余り。必要な時に臨機応変に引き出しからだし使用している。

研究室で

研究室ではデータを入力し凝視している。分析のために、「色彩語彙がない言語」「4人称代名詞のある言語」「譲渡可能と不可能の区別のある言語」「動詞の派生が生産的である言語」「数詞のない言語」「類別詞のある言語」「系統不明な言語」「A語族とB語族の境目に位置する言語」と、色々な角度から数百以上の言語資料を観察している。約7000ある世界の言語のうち私が見ている言語はごくわずか。そのほとんどが、研究されていない。過半数が消滅危機言語と言われている。

フィールドワーク

調査で苦労することは、「良いインフォーマント」を探すこと。良いインフォーマントとは、対象言語の母語話者であり、媒介言語(仏語、英語、西語など)で説明可能で質問に付き合う根気があること。欲を言えば、昔からの伝統や知恵に精通していること。私は女性なので、女性のほうがよい。男性だと後々厄介になることが多い。時間のある人は少ない。子供が10人もいて子育てに忙しい、子供がいなくても仕事がある。多くの場合、現地在住日本人の紹介は、良い人にあたらぬ、数日間の土地案内にとどまる。自分で歩き相性を確かめ決めるのが一番。すぐに要望を伝えるのは、失礼に思う。トンガに到着し仲良くなっても、突然『トンガ語には、普通語と王族語の使い分けがあるのでしょうか?』とは切り出せない。民宿の主人はフィジー出身のインド系であった(フィジーではフィジー語とヒンディー語と英語が話されている)。「フィジー語の代名詞には三数がありますよね。」と聞きたくても、抑えている。非常に親しくなるまでは、『フィジー語とヒンディー語を話すのですか?』と、聞くにとどまった。しかし、幸いにも私はインフォーマントに恵まれた。マダガ

スカルでは、毎日朝と夕方3時間、一人の女性が懸命に協力してくれた。その後もほかの調査地でも私は人材には恵まれた。

技と日本文化で身を助ける

ふりかけ、カレー、楽器など色々なものを持参し、調査や現地での信頼関係構築に役立てた。ふりかけは「黄色いのは玉子」「薄く赤いのは鱈子」「これはゴマ」と話をする。魚介類の語彙、色彩語彙、修飾語と被修飾語の語順、指示詞を確認ができる。一日中、動詞の変化について聞いていては、協力者も飽き飽きする。カレーの具材は現地調達可能。食べ物も誰もが興味をもつことなので、場が盛り上がる。最後に楽器。ヴァイオリンを弾くと、レストランの食事や送迎を免除ということは何度もある。

単語一つ一つが思い出

私の調査言語は、主にマダガスカル語とルルツ語。集めたデータは愛着がある。知りたい情報を得るのに何日もかかることもある。喧嘩途中で得た資料もある。喧嘩中にメモするかねと言われても。子供と遊んでいるときに得た資料、海を泳いでいるときに得た資料。帰国して、長母音かも、子音交替規則が明らかになったが例が少ない、変な例文がある、と問題が出てくる。それを確かめるために調査地へ戻る。言語の記述は科学的貢献だけではなく、地域社会に還元するためにも、一度ははじめたらやり遂げなければならない。

最後に

研究者としては、自分の研究に誇りを持って継続し専門分野以外を学ぶことを忘れないこと。教育者としては、世界で一つだけの授業を提供すること。学術は孤独な闘いである。息詰まり光が見えないことも多々ある。回り道をするかもしれないが、これからも初心を忘れずに、臆することなく自分の信じる道を進んで行きたいと思う。

(にしもと のあ)

表1 オーストロネシア語族の対応語の例

日本語	マダガスカル語	マレー語	ルカイ語	タダログ語	マオリ語	トンガ語	サモア語
	(台湾)						
子供	zanaka	anak	lalak	anák	tamaiti	tamasiʔi	tamaititi
耳	tadiny	talinga	calinga?	taqiŋa	taringa	telija	taliŋa
空	lanitra	langit	gari	langit	rangi	lanji	lanji
手	tánana	tangan	ʔa:rimá?	kamáy	ringa	nima	lima



写真1 マダガスカル南部の調査地にて

スピード感

鈴木 咲衣

名古屋大学に在籍していた学部時代の4年間、私はフィギュアスケート部に入っていた。入っていた、というだけでなく、かなり夢中になっていて、記憶に残っているほとんどの時間を大須のスケートリンクで過ごした。フィギュアスケートには人生が詰まっていた。そこから学んだことは今でも私の人生の指針になっている。

例えば「スピード感」。フィギュアスケートはスピードが命だ。ジャンプもスピンもスケーティングも、一定以上のスピードがあることで物理法則が綺麗に現れて、見た目も美しく技が決まる。でも滑っている本人からすると、スピードを出すってちょっと怖い。自分の状態を理性で統制できないほどのスピードが出ると、恐くなってついブレーキをかけてしまう。だって、もし転んだりぶつかったりしたら痛いから。練習を重ねて慣れてくると、そのうちに恐怖は（なくなりはないけど）無視して、スピードに身を預けて楽しむことができるようになる。肩の力を抜いてスピードに乗って流れに身をまかせる。ところどころ重要な所で意識を集中してタイミングよく技を決める。その感覚がすごく大事。すべての動きを統制しようとしてはいけない。

人生のいろいろな局面で、よくこの感覚を思い出す。恐がってはいけない。スピードに乗って、ところどころにある重要どころを見極めて意識を集中しなくちゃ、と。（それに気がつくのが遅くて勢い良く壁に激突したり、もしくはタイミングを間違えて豪快に転ぶこともたまにはある。しかも結構痛い！）例えばなにかに引っかかりを感じたとき、「気にするほどのことでもないか」と納得したり「これは多分こういうことだろう」と自己完結したりしないと、うまく前に進めない。ましてやスピード感を出せない。「重要どころではない」と判断された引っかかりは、その全容を完全に認識されないまま、景色と共にどンドン後ろに流されて、思考から離れていく。

一方で、数学は真逆だ。すべての動きは統制されなくてはならない。私はすべての対象を正確に定義し、それを用いてやること一つ一つに神経を払い、全く誤解の余地のない理論を作らなければならない。人々が日常で使う言語は、ある程度その単語の表す意味に幅がある。「赤」という単語で思い浮かべる色は、りんごの色だったり、バラの色だったり、人それぞれだろう。でも数学で使う言語には、少しの幅もあってはいけない。そして数学では、どんな小さな引っかかりも見逃さされてはならない。引っかかりはそっくりそのまま、本当にそのまま、心にとどめておく。それはずっと思考の底の方であって、たまに浮き沈みしながら、時間とともに全容が明らかになっていく。時間はただただ流れていて、そこにメモリ（目盛）はない。

数学の「応用」を考える時も、現実社会と数学のスピード感の隔たりはやっぱり無視できない。現実社会のスピード感に合わせた応用をめざしている純粋数学者に（少なくとも私は）会ったことがない。数学の時間は（相対的に）とってもとってもゆっくり流れているのだ。そしてそこにメモリを

書くこともできない。（だから、無理にメモリを書かないでくださいね。）



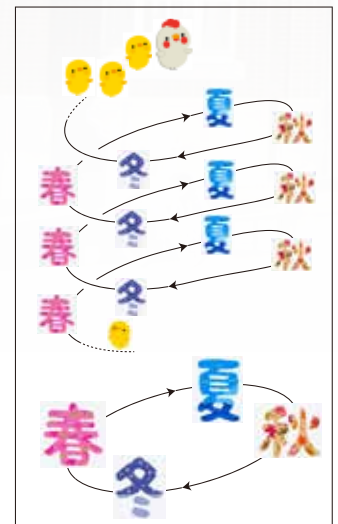
ポーランドでEvaが読んでいた葉廣先生の論文

ポーランドの合宿型研究集会で、スイスから来たEvaという女の子に出会った。彼女は当時、私の指導教官だった葉廣先生の論文を読んでいて、それが難しいと言ってちょっと苦戦していた。合宿初日の夜、宿舎に蚊が飛んできて、私たちはなかなか眠ることができなかった。すると彼女がおもむろに論文を丸め、その蚊を次々と叩いて「I found a very important practical application of Habiro's paper!」と言った。私たちは顔を見合わせて笑った。上手だな、と思った。確かに、彼の論文は私たちの眠りを守ったから。

なんだか季節感の全くない文章になってしまったけれど、数学をしていても季節感はあるんですよ。今は冬で、カフェの窓ぎわであたたかな抹茶ラテとブルーベリースコーンを食べています。季節の移り変わりは思考の底での「引っかかり」の変化も促してくれる気がする。季節がめぐり、数学もめぐる。

あ、数学はめぐっちゃ駄目か。いいこと言ったと思ったのに。（じゃあinfinite coverかな。通じないですね。）

（すずき さきえ）



季節の infinite cover

個性が宿る脳

今吉 格

美しいと感じる絵画や、心が弾むように聴こえる音楽は人それぞれである一方で、クモや蛇の写真を突然見せられると（多くの人は）おおよそ恐怖感を覚える。皆人それぞれ多様な個性や性格がある一方で、専門家では無い人が、人間の脳のMRI画像を見ると大して差は無いように見えてしまう。世の中には本当に色々な価値観を持った人がいると痛感する一方で、人間の思考や行動を規定する脳が、非常に似通った構造を持っている事はある意味驚きである。私が実験で使用しているマウスというげっ歯類でも、個体によって性格のようなものがある。実験用のマウスは近交系として維持されており、個体間のゲノムDNAの配列はほぼ完全に同一である。それにもかかわらず、同じ近交系のマウスの間でも、さらには同じ父親・母親に由来する兄弟マウスであっても、異なった性格を見せることも多い。あるマウスは非常に活発で時には攻撃的であり、あるマウスは臆病で引っ込み思案であるかのように、我々観察者である人間の目に映ることがある。このような動物の性格や個性の多様性はどのように生み出されているのであろうか。実験室でマウスの脳を解剖して日々観察しているが、ちょっと拡大して見るぐらいでは脳の大まかな構造はすべて同じに見える。しかしながら、脳の構造や動作メカニズムの細かな差異の膨大な積み重ねが、実験動物、ひいては我々人間の個体間の個性や性格の違いを生み出すものになっているものと考えられる。

私はマウスを用いて、哺乳類の脳の設計図のしくみと、脳の可塑性について研究を行っている。具体的にはマウス胎児脳における神経幹細胞やニューロン・グリア細胞の分化制御機構と、生後脳・成体脳におけるニューロン新生という現象に特に注目して研究を行っている。

我々が無意識に行っている体温や呼吸の調節、睡眠などの本能のコントロールなどを行う為には、脳は単に構造物として正しく発生するだけでなく、多様な機能を発現するネットワーク構造として発生する必要がある。そのためには、脳の中でニューロンの産生や配線が正確に再現性良くコントロールされていなければならない。無数の細胞と神経線維のネットワークからなる脳において、世代を超えて再現性の良い脳発生が繰り返し実現していることは驚異的であるとも言える。実験マウスはキツネの匂い（天敵匂）やヘビの模型に対して先天的な恐怖応答を示す。つまり、天敵が本能的に怖いものであるという認知や、それによって惹起される天敵に対する防御・逃避反応でさえも、脳の設計図に組み込まれており、脳の発生・発達とともに生まれながらに内包されていると考えられる。このように複雑な脳機能さえも含んだ形で、脳の発生は再現性良く繰り返される必要がある。近年の分子遺伝学、発生生物学や神経科学の進展により、脳の発生・発達を制御する主要な役者として機能する遺伝子や、それらの遺伝子産物の機能はかなり明らかになってきている。しかしながら、多種類の遺伝子やたんぱく質がどのように協調的に機能することで、複雑な脳神経系が、機能発現するポテンシャルを担保された形で再現性良く発生するのか？というメカニ

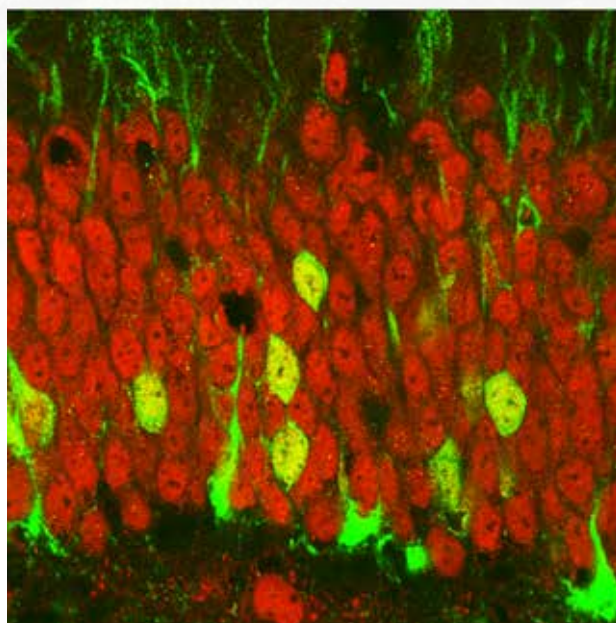
ズムを統一的に説明できるまでの理解には至っていない。近年、高度な顕微鏡技術を適応したライブイメージング技術や、光や薬剤を用いて遺伝子やたんぱく質の機能に詳細な損動を加えるような実験技術が興隆してきている。今後、脳の発生・発達・機能発現について、様々な角度から観察と介入実験が繰り返され、理解が拡大していくものと期待される。

一方で、発達の過程で徐々に表出してくる動物の個体間の個性や性格の違いは、どのような神経メカニズムが背景にあるのであろうか。我々は、個性創発のメカニズムとして、ニューロン新生という現象に着目して研究を行っている。古くから哺乳類の脳神経系を構成するニューロンは、主として胎児期に産生され、大人になってからは新しくは産生されず、かつ、再生能力はないと信じられてきた。しかし、脳の中の記憶を司る海馬や、匂い情報処理の一次中枢である嗅球においては、生後や成体脳においても持続的にニューロンが一生涯産生され、神経回路に組み込まれ続ける事が明らかになってきた。脳の発生は大人になってからも引き続いて起こっているととらえることもできる。この脳を構成するニューロンが日々の生活の中で時々刻々と入れ替るという現象は、脳が持つ可塑性の最も極端なケースであると思われる。

今後の課題として、この生後脳・成体脳ニューロン新生がどのように個性創発につながるのか？というメカニズムを検証し、哺乳類の脳の多様性と個性を生み出すメカニズムとして、ニューロン新生という生命現象の生理的意義の新たな側面を明らかにして行きたいと思っている。

最後に、再び白眉プロジェクトに参加することができ、今後の研究生活にも今から予想出来ない新たな展開が訪れてくれることをとても楽しみにしている。

(いまよし いたる)



大人で脳で新しく生まれたニューロン

白眉研究ピックアップ

Cultural differences in inconsistent brand image evaluation: The influence of dialectical thinking.

Satoko Suzuki
鈴木 智子

Researchers in the brand management theory often emphasize consistency. For example, one of the brand management gurus, Kevin Lane Keller (2013) says "without question, the most important consideration in reinforcing brands is *consistency*" (p. 480, italic added). Indeed, past research highlights the benefit of brand consistency, such as developing and reinforcing brand equity and nurturing a loyal customer base. However, phenomena in the Japanese market suggest that consistency may not always be necessary. For example, Universal Studios Japan has dramatically changed its brand image and brand personality since its opening in 2001; still, the sales and number of visitors are constantly growing. Furthermore, changes in logos and product packages are commonly observed in Japan, whereas they are less preferred in the U.S.

Recent findings in cultural psychology have identified that there are cultural differences in attitudes

toward consistency (Spencer-Rodgers et al., 2010). In Western cultures, an important characteristic of its folk epistemology is its focus on "linear" thinking and belief that inconsistencies need to be resolved. On the other hand, in East Asian cultures, a set of folk beliefs that view the nature and objects as constantly changing and inherently contradictory is prevalent ("dialectical" thinking). These cultural differences in thinking styles may affect various consumer behaviors including brand evaluations. I propose that Japanese may be more tolerant toward brand image inconsistency.

Based on the above discussion, my research focuses on the empirical examination of cultural differences in (in)consistent brand image evaluations. The findings of this research aim to propose a new theory in brand management that incorporates Asian perspectives.

(すずき さとこ)

Strong electron correlation in molecular electronic-structure theory.

Yuki Kurashige
倉重 佑輝

I'm working on molecular electronic-structure calculations and high performance computing implementations. In electronic structure calculations, we calculate how electrons behave in molecules according to the fundamental equations of quantum mechanics, predicting chemical reaction and the required energy, for example. The spectacular dream of solving problems of chemistry on a computer is may seem like a pipe dream, but thanks to the rapid evolution of computer technology and the development of the electronic-structure theories, the dream is coming true even with a computer on your lap.

There still remain challenges to analyze strongly correlated systems. In condensed matter physics, 'strong electron correlation' is a critically important concept that brings about many remarkable phenomena such as superconductivity. By contrast, it has been overlooked in chemistry until recently because most organic molecules are well described by the mean-field picture, and molecular orbital theory has enjoyed great success over decades. But now, the importance of strong correlation effects in chemical reactions has begun to be understood due to the connection with the exceptional catalytic ability of transition metal atoms in metalloenzymes. The biggest obstacle in studying strong correlation arises from non-trivial exponential complexity of

strongly interacting electrons, which is similar to the difficulty in solving the Hubbard-model and is called the 'multireference' problem in quantum chemistry. To solve this remaining problem in quantum chemistry, we utilized the density-matrix renormalization group (DMRG) theory, which can efficiently compress the exponentially growing complexity of the wavefunction by encoding the special entanglement structure that is present in low-lying physical quantum states.

In the study of the Mn_4CaO_5 cluster in photosystem II, we compute the near-exact many-electron wavefunctions of the Mn_4CaO_5 cluster with more than 10^{18} quantum degrees of freedom by the *ab initio* DMRG method. This is the first treatment of multi-nuclear transition metal complexes beyond the mean-field picture of density functional theory. Our calculation revealed many electronic properties, such as oxidation states and spin states of the manganese atoms, which are directly associated with the mechanism of the catalytic water-splitting reaction. We also revealed rich information contained in the wavefunctions on the catalytic ability of the cluster through an analysis for quantum entropy along the catalytic cycle. The results have brought us, although only slightly, one step closer towards understanding "*how multi-nuclear complexes exhibit exceptional catalytic ability in metalloenzymes?*"

(くらしげ ゆうき)

Black hole accretion disk as a central engine of transient astronomical phenomena

Norita Kawanaka

川中 宣太

Transient astronomical phenomena, the main target of my research in the Hakubi project, are astronomical events whose duration is much shorter than typical lifetimes of stars ($10^7 - 10^{10}$ years). The objects that play a main role in transient astronomical phenomena (and that I am most interested in), are not living stars, but what is left after the death of stars, such as supernova remnants, neutron stars, black holes, etc. In this column I would like to survey the activities of black holes (BHs), as well as my research interests. When a star whose mass is larger than 8 solar mass exhausts its fuel for nuclear fusion, it would not be able to sustain its core against its own gravity and would rapidly collapse. This may cause an energetic explosion named core collapse supernova. If a star's initial mass is more than 20 solar mass, the collapsed core becomes a BH. A BH is a compact object whose gravitational field is so strong that even light cannot escape it. It can accrete surrounding gas and a rotating gas inflow is formed around it. This is so called a BH accretion disk. BH accretion disks are the most efficient energy production sites in the Universe. They can shine very brightly and/or launch energetic outflows by liberating the gravitational energy of infalling gas, which may account for the activities of transient astronomical phenomena such as active galactic nuclei (AGNs; the compact central region of a galaxy shining very brightly), X-ray binaries (X-ray-luminous compact objects), and Gamma-Ray Bursts (GRBs; the most luminous phenomena in the Universe, may be related to the death of massive stars), etc. All of them can emit an enormous amount of energy in forms of radiation and high energy particles within a very

short time scale. I have been studying the structure of BH accretion disks powering these phenomena, and investigating how they emit radiation and energetic particles. For example, an accretion disk becomes unstable under certain conditions, and then the energy release from a BH accretion disk would be no longer steady but sporadic. I applied this model to GRBs to account for their time variability (see the figure). During the Hakubi project, I would like to continue the study of accretion disk instabilities and their applications to various kinds of transient phenomena, and also to investigate the emission of high energy particles (photons, neutrinos, atomic nuclei, electrons, etc.) from these phenomena and make the predictions for future observations. (かわなか のりた)

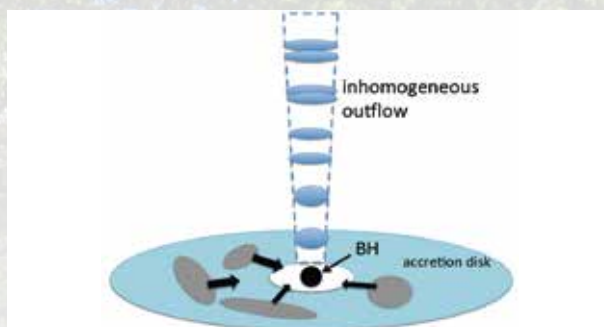


Figure 1: Schematic picture of how a dynamically unstable accretion disk behaves. Sporadic mass accretion driven by the disk instabilities may produce inhomogeneous outflow, which may account for the violent time variability observed in the accreting black hole systems such as AGNs, X-ray binaries and GRBs.

活動紹介

白眉の日 2016 @KKR 京都くに荘 (8月6日) 金 玫秀
Hakubi Day 2016 at KKR Kyoto Kuniso on August 6th

2016年で第5回を迎えた「白眉の日」(ホームカミングの日)も暑い日差しの下で始まりました。今年から白眉を離れた藤井 啓祐さん(4期)、樋口 敏広さん(5期)、前野 ウルド 浩太郎さん(5期)が京都にカミングして講演をしてくださいました。東京大学に異動された藤井さんからは「量子コンピュータ」についてお話いただきました。樋口さんはアメリカ・ワシントンから戻ってくださり、白眉で過ごした日々とポスト白眉の日常における自然科学と人文学について長いお話をいただきました。前野さんからは、地球規模課題に挑んでいるご活躍をたくさん見せていただきました。

白眉研究者とその家族が交流する白眉の日にふさわしく、2016年はご家族の方もたくさん参加してくださり、セミナーも盛り上がりました。細さんの「ヘビとカタツムリの、左と右」、越川さんの「羽の模様」についての発表は研究者も家族も全員が楽しめたと思います。お二人の話に影響を受け、研究や自然に興味を持つ子供がいるかも知れないと期待しています。そして、真夏の夜

は深くなり、花火や割れないシャボン玉を楽しむ子供達が遊び回る中、みんなと語り合い、交流を深めていく時間を過ごせました。司会の私のミッションは「みんなの笑いを取ること」でしたが、みなさんはどんな白眉の日でしたか。来年は8月5日です。どんな話が聞けるかとっても楽しみです。

(きむ みんす)



第7期オリエンテーション、歓迎懇親会 (10月4日)

Orientation meeting and welcome reception for new 7th batch researchers on October 4th

林 眞理

2016年10月4日、京都大学学術研究支援棟・白眉センターにおいて第7期白眉プロジェクト（グローバル型）採用者による研究計画発表会が執り行われた。企画、運営は第6期白眉が中心となっており、6期・林の開会宣言により会がスタートした。

第7期10名中、遅れて着任する2名のうち1名を除く9名が参加し、発表の順番は岩尾、金沢、川中、金、高橋、藤原、別所、堀江、吉田であった。期待どおり今期も研究分野が非常に多岐にわたっており、一人あたり8分と短い持ち時間であったにもかかわらず、各自が要点を押さえながらも魅力あふれる発表を行っていたのが印象的であった。質疑応答の時間も非常に限られてはいたものの、7期の参加を待ちわびていた先輩白眉や関係諸氏が活発に質問を投げかけ、会は盛況のうちに幕を閉

じた。その後は時計台の会場へと移動して第7期白眉歓迎懇親会が開催された。和やかな雰囲気の中での暫しの歓談ののち、懇親会の企画として第7期白眉がこれまでの遍歴や、研究以外のプライベートに踏み込んだ自己紹介を行った。同じ趣味や嗜好など、異分野の研究者との意外な共通点が明らかになる一幕もあり、お互いの人間性の持つ魅力を理解し合うのは、学際的な交流を深化させていく一助になることを改めて感じることができた夜であった。真剣な研究者としての表情が見られた緊張感のある研究計画発表会とは打って変わって笑い声のあふれる賑やかな会となり、第7期白眉の研究に対する真摯な姿勢だけでなくユーモアのセンスも垣間見ることができた濃密な1日となった。

(はやし まこと)



白眉秋合宿 (12月9日 - 10日) @関西セミナーハウス

Research Camps in Shugakuin Kansai Seminar House, Kyoto
(Dec 9-10, 2016)

鳥澤 勇介

2016年12月9日・10日、第7回目となる白眉合宿が京都修学院関西セミナーハウスにて開催された。第7期の白眉研究者を新たに迎え、交流会を兼ねた勉強会として自己紹介を中心とした発表会を開き、白眉研究者同士の親睦を深めることを主な目的とした。合宿期間中、9日全日と10日午前中に発表会および離籍者講演を催した。各発表では、事前に集めた各自が思う「白眉研究者に聞いてみたい質問」を、発表者にくじを引いてアドリブで答えてもらう質問コーナーを設けることで交流を図った。離籍者講演では、4期の額定其勞さん、小林圭さん、5期の村上慧さんが発表、白眉プロジェクトでの仕事に加えて、これまでの歩みやポスト白眉の生活などを紹介する白眉らしい刺激的な発表であった。発表会の休憩時間には、曼殊院門跡など関西セミナーハウス近隣の散策を楽しむ研究者も多くいた。初日のセミナー後には交流会を設け、参加者全員でお絵かきゲームを行い、更なる交流を深めた。二つのチームに分かれた対抗戦で、与えられたお題を絵で表現し、そのお題を皆で当てる単純なゲームではあるが、予想以上の盛り上がりを見せた。交流会後も、寝る間を惜しんで更なる議論が交わされ、親睦を深めた。

セミナーには約30名の研究者が参加し、研究紹介に加えて、自分の生き立ちや興味などを踏まえて、研究の取り組み方・熱意を発表する内容であった。多種多様な

分野の発表であるものの、どれもその研究に対する情熱の伝わる内容に、分野間の壁を感じさせない発表であった。二日目には、センター長の光山先生より、伝えることの本質に関して、前日のお絵かきゲームを例に、伝える側と答える側の協力の必要性など、身をもって感じることでできる発表であった。また、科学技術振興機構研究開発戦略センターの永野博先生より、「世界の若手研究者支援-白眉プロジェクトは特殊ではない」というタイトルで、若手研究者を支援する世界の取り組みに関する発表があり、今後の白眉プロジェクトを考える上で非常に参考になる内容であった。セミナー後は、ビュッフェスタイルの昼食を囲み、「白眉研究者の目指すもの」をテーマに対話会を開き、白眉プロジェクトに関しての更なる議論を行った。議論には、毎日新聞社記者の榊原雅晴氏も参加、主に離籍者白眉からの意見を元に、今後の白眉に関して、我々はどうあるべきか、白眉として何をしていくべきか、批判的な意見も交えつつも建設的に、非常に熱い議論が交わされた。今回の合宿は、お互いに学び合え、刺激し合え、また多くを考えさせられる会であったと感じており、1泊2日の短期間の中でゲームや議論を通じて、白眉研究者間の絆が深まったと感じている。何よりも皆の白眉に対する熱い思いをひしひし感じる合宿であった。

(とりさわ ゆうすけ)



白眉セミナー

白眉センターでは原則として8月を除く月2回(第1・3火曜日16時から)センターの全スタッフが出席するセミナーを開催しています。各研究者が順番に企画担当者となり、様々なトピックについて議論が行われます。2011年度からは通常英語で発表・質疑応答を行っています。以下に2016年度のセミナー情報を掲載します。

平成28年

- ◆第111回 白眉セミナー 2016年4月5日(火)
中西 竜也『近代中国ムスリムとイスラーム改革主義』
ファンステーンパール ニールス『河瀬友山—近世後期京都における「無料」の価値』
- ◆第112回 白眉セミナー 2016年5月10日(火)
村上 祐二『マルセル・ブルースト研究』
- ◆第113回 白眉セミナー 2016年5月17日(火)
末次 健司『キノコを食べる植物の特殊な繁殖戦略』
原田 浩『酸素の過多と枯渇は災いの元?』
- ◆第114回 白眉セミナー 2016年6月21日(火)
和田 郁子『近世インドの港町にみる邂逅の諸相』
信川 正順『最新鋭のX線天文衛星「ひとみ」で天の川銀河中心の活動性に迫る』
- ◆第115回 白眉セミナー 2016年7月5日(火)
ジェルミー ラブリー『What is possible on Hakubi? Reflections on Education and Self-Overcoming』
坂本 龍太『黒眉ゼミ』
- ◆第116回 白眉セミナー 2016年7月19日(火)
小出 陽平『「壁」をこわす』
王 柳蘭『白眉でチャレンジできたこと—研究と繋がり』
- ◆第117回 白眉セミナー 2016年9月20日(火)
ヴァンサン ジロー『私の哲学研究』
- ◆第118回 白眉セミナー 2016年10月18日(火)
原村 隆司『動物行動学を外来種防除に適用できないか?』
- ◆第119回 白眉セミナー 2016年11月1日(火)
別所 裕介『南アジア社会に滲出する「中華」をどう捉えるか?:私たちの現代中国理解を拡張するために』
- ◆第120回 白眉セミナー 2016年11月15日(火)
金沢 篤『幾何学と物理学の交流』
- ◆第121回 白眉セミナー 2016年12月6日(火)
藤原 敬介『百年先の言語学』
- ◆第122回 白眉セミナー 2016年12月20日(火)
川中 宣太『高密度天体と突発的天体現象』

平成29年

- ◆第123回 白眉セミナー 2017年1月10日(火)
岩尾 一史『出土文書から過去を復元する』
- ◆第124回 白眉セミナー 2017年1月17日(火)
金 宇大『刀剣から読み解く古代の「日韓」交流』
- ◆第125回 白眉セミナー 2017年2月7日(火)
高橋 雄介『パーソナリティ特性と精神病理傾向に関する発達行動遺伝学』
- ◆第126回 白眉セミナー 2017年2月21日(火)
吉田 昭介『微生物の多様性が生みだす多彩な機能』

学部から博士まで8年間(1年間留学していたので)通っていた駒場キャンパスに3年ぶりに出戻りました。学部のころからあちこちうろろしていたこともあり、久しぶりのキャンパスでは行き会う人々に「あれ、しばらく見なかったね」と温かく迎えていただきました。

所属先の「科学技術インタープリター養成部門」は、全学の大学院生を対象とした副専攻プログラムを提供しています。「科学と社会をつなぐ架け橋」を掲げ、異分野の大学院生が理科教育、博物館の在り方から昨今話題のクリスピーキャス9、水素水、人工知能、シンゴジラまでを熱く語り合う場です。私の仕事は彼らの議論に燃料投下をしたり、自分が開催するワークショップに巻き込んだりなど、事務・教務仕事が増えた以外は白眉時代とやっていることはたいして変わっていません。

大学院生の彼らは「科学コミュニケーションとは何か」「異分野コミュニケーションを促進するにはどうすればよいのか」を真剣に考えています。その答えは一つではありません。しかし白眉での経験からするには必要なのは自由に思考する時間を研究者に与え、みんなで美味しいものを囲んで夜更けまで語り合うというシンプルな、でも今の大学環境では意外と簡単ではない条件が必要なのではないかなと考えます。

また、離れてしまっても、あるいは時間がたってもそのつながりは続くでしょうか。それを担保するには共有する価値



や拠り所が必要になってきます。白眉では、イベントや刊行物をともに作り上げることで共有してきた価値があります。だから今でも他愛のない話題でメールをしあう人がいたり、専門家として仕事を依頼したりされたりさせていただいています。「同期」の堀先生には農業指導を仰いだりもしています。そして何より生循環研究会。異分野の研究者が集まって「生循環」という概念を材料に熱い議論を行う場があります。誰の専門でもなく、誰もが専門家になる概念を作り上げるプロセス。それもまた1つの異分野コミュニケーションの形なのかもしれません。(えま ありさ)

江間 有沙

第3期特定助教、在職2012年4月1日～2015年3月31日 2015年4月1日より東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構科学技術インタープリター養成部門 特任講師

ポスト白眉の日常

江波 進一

第2期特定准教授、在職2011年4月1日～2016年3月31日 2016年4月1日より国立環境研究所 環境計測研究センター 主任研究員

昨年の春からつくばにある国立環境研究所でお世話になっております。国立環境研究所は1974年に発足した国立公害研究所を前身とし、幅広い環境研究に学際的かつ総合的に取り組む我が国唯一の研究所です。多種多様な分野の魅力的な研究者に囲まれ、いい刺激を受けています。幸いなことに実験室のスペースも以前より広くなり、素晴らしい環境で研究させていただいております。またつくばの夜の闇は深いため(褒め言葉です)、読書にも精を出しております。

こちらに来て変わったことといえば、教育に携わる機会が増えたことかもしれません。ご縁があって東京農工大学で環

境科学の非常勤講師をさせていただいており、また京都大学地球環境学舎から修士の学生さんをインターンシップで迎え入れ一緒に研究を行いました。大学にいたときよりも教育の機会があるというのも珍しいですが、日々学ぶことが多く、充実しています。上記の関係で現在、地球環境学舎の特任准教授を兼任させていただいており、また今年の春からは京都大学化学研究所の客員准教授としてもお世話になる予定です。京大との良縁が続いていることをとても嬉しく思います。これも白眉の最終年に都七福神を巡ったご利益かもしれません!?

若さは酒のない酔いなのだ、とゲーテは言っています。我々は誰しも酔っているべきだ、とも。白眉時代は5年間、本当に気分よく酔わせていただきました。これは歴代センター長、プログラムマネージャー、水野さん、古家野さん、スタッフの皆様、そして多くのファンキーな同僚達のおかげです。白眉の良さの一つはその「カタギではない」ところにあると思います(褒め言葉です、念のため)。オモロクなくちゃ、京大じゃない。現役白眉の皆様もどうかいい感じに酔っぱらってください。幸い二日酔いにはなっていないので、僕もまた新たな酔いを探していきたいと思います。(えなみ しんいち)



今年のモットー
「阿呆、燃えているのなら消せ、燃えてしまったのなら、また建てる(ゲーテ)」

佐藤 弥

第1期特定准教授、在職 2010年4月1日～2014年9月30日 2014年10月1日より京都大学大学院医学研究科発達障害支援医学講座 特定准教授

私は白眉の後、医学研究科の寄附講座である発達障害支援医学講座に移りました。講義や事務はありますが、研究がメインの仕事です。白眉時代とそれほど変わらず、楽しい日々を送っています。

研究活動として、白眉の間に集めたデータを論文化したり、白眉のときに得た着想で実験したりしています。思えば白眉時代は、自由な時間を生かして論文や本を読みふけり、多様な研究者と議論して発想を広げ、すばらしい実験環境をいただいて山ほどデータを取らせていただきました。視野を広げて混ぜ合わせたぶん題材は新しいことばかりで、扱うのが大変ですが面白いです。例えば、私の研究内容は感情コミュニケーションの心理学・神経科学研究といったものだったのですが、伏木元センター長の研究に共通点を見出してコラボレーションをお願いし、食物を刺激として実験しました。食物が我々の感情を無意識のうちに刺激していることが分かり、驚きました。また白眉セミナーで聞く哲学や宗教の話は人生に深い示唆があると感じ、自分もそうした研究ができればと、幸福の神経基盤を調べて発表しました。科学的なアプローチで初期仏典と共通する主張にたどり着き、愉快に感じました。白眉の物理学者たちの高度な数学を用いたアプローチにも憧れ、自分も解析を洗練させようと取り組み、執筆中の顔処理の神経科学の原稿では人生で初めて微分方程式を書きました。



家族と天橋立にて。

研究の他、最近は武術の修行に励んでいます。運動不足でなまった身体をメンテナンスくらいの軽い気持ちで始めたのですが、年上や同年代でがんばる仲間達と出会って刺激を受け、骨を折ったり折られたりしながら予想外にハードな修行に取り組んでいます。元気になりました。

また定期的に、家族とお出かけしています。大成果を出しながら家族を大事にする白眉の同輩を見習いました。子供の世話は普段ほとんどできていないのですが、お出かけのときくらいはと、企画したり運転したり真剣に遊んだりしております。ポジティブ感情のエネルギーを充填できます。

こうしてコツコツ研究する日々の中、ポスト白眉研究者として少しでも意義ある成果を発表できればと思います。

(さとう わたる)

Y UMEKUSA

エッセイ

サーフィンと研究の意外な共通点

安藤 裕一郎

これまでに複数のスポーツをやってきた。テニス歴は20年以上になる。しかし、あまり好きではない。無料のテニスコートはあるが、ここ数年は使っていない。運動不足を解消しようと数年前に始めたのがサーフィンである。5年間在籍した九州大学伊都キャンパスの近所には幾つものサーフポイントがある。夏のイメージが強いスポーツだが、日本海側のハイシーズンは意外にも冬である。ダウンジャケットを着ても凍えるような真冬に海に入り、着替えの時には寒空の下でタオル一枚になる。正気の沙汰とは思えない。

波が小さすぎて1回も乗れない日もある。身長以上の波に飲み込まれて溺れる日もある。丁度良い波なんて10日に1日程度だろうか。辛いことの方が多はずなのになぜかハマっている。下手の横好きだが、遠出してでも海に行きたくなる。何故なのか？

波乗りに失敗した時、自然が相手だと素直に諦められるからかもしれない。人間の力では波を思い通りにすることはできない。ただ、それを歯痒く思ったことは一度もない。自然の偉大さを感じ、畏敬の念を抱くだけだ。そして10回に1回程度、自然は素敵なプレゼントをくれる。この回数も絶妙なのだろう。私はこういう状況がたまたま好きなのだ。

意外だが研究にも共通点がある。現在は工学研究に携わっているが、最先端技術を駆使しても自然を制御することはできない。ただ、自発的に起こりうる現象を利用させてもらうだけだ。無理なものは労力と財力をかけても出来ない。出来るものは簡単な手段でも出来る。すべては自然が決めている。そして研究の大半は失敗する。ごく一部の研究が成功し、この上ない興奮を与えてくれる。自分にはどうすることもできない偉大な存在からのバランスのとれた鉛と鞭が、私を惹きつけて止まないのだろう。自然の偉大さを肌で感じる事ができるサーフィンと研究に心から感謝している。

(あんど う ゆういちろう)



真冬のサーフスポット（福岡県の糸島半島にある野北ポイント）。

受賞・報道

武内康則 特定助教が「第10回立命館白川静記念 東洋文字文化賞奨励賞」を受賞しました(2016年10月15日)。

榎戸輝揚 特定准教授と 林真理 特定助教らが、第4回京都大学学際研究着想コンテスト2016において、最優秀賞を受賞しました(2016年11月1日)。

山道真人 特定助教が「第9回個体群生態学会奨励賞」を受賞しました(2016年11月4日)。

越川滋行 特定助教が「日本動物学会 成茂動物科学振興賞」を受賞しました(2016年11月17日)。

石本健太 特定助教が「第33回井上研究奨励賞」を受賞しました(2016年12月12日)。

メディア掲載記事

西山雅祥 特定准教授の研究内容が、「人工分子伸び縮み実証」として中日新聞に掲載されました(2016年4月12日)。

西本希呼 特定助教が「NHK Eテレ ニッポンのジレンマ」に出演しました(2016年10月30日)。

榎戸輝揚 特定准教授の活動内容が、「科学絵本 アフリカに光」として読売新聞に掲載されました(2016年11月20日)。

米田英嗣 特定准教授の研究内容「悪い子の良い行動から何を読み取るか? -自閉スペクトラム症を持つ小学生・中学生の善悪判断-」に関連する紙面掲載記事が、京都新聞(11月30日)、産経新聞(11月30日)、毎日新聞(12月1日)、福井新聞(11月30日)および日刊県民福井(11月30日)に掲載されました。

書籍

Jennifer Coates

Making Icons: Repetition and the Female Image in Japanese Cinema, 1945-1964 (Hong Kong University Press) (2016年10月)

西本 希呼

『マダガスカルの子話II』 飯田卓・西本希呼・深澤秀夫・RAZAFIARIVONY Michel 編著
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(2016年3月31日)

西本 希呼

『名前が語る家族史』『世界の名前』(岩波書店辞典編集部編、pp. 48-50.) 岩波書店(2016年4月)

NISHIMOTO, Noa

"Le multiculturalisme malgache face aux défis du XXI^e siècle : diversité ethnique, politiques éducatives en cours et développement économique", chapitre 9, pp. 105-120, Jean-François Graziani et Noriyuki Nishiyama (ed.) Le Japon, acteur de la Francophonie. (2016年8月)

YAMAYOSHI, Asako et al.

"Photo-dynamic antisense regulation by photo-cross-linkable antisense oligonucleotides"
Photoregulation of DNA/RNA functions, Asanuma et al, eds, Pan Stanford Publishing Pte. Ltd., in press.

有吉 純平、山吉 麻子

「次世代を担う、核酸医薬、免疫療法、遺伝子治療、細胞医薬品の課題と各疾患治療への横断的展開」(発行人:高薄一弘、情報科学協会)印刷中

林 真理

「テロメアクライシス期におけるM期停止を介した細胞死機構」『生化学』, 88(6), pp. 756-760, 日本生化学会(2016年12月)

林 真理

「テロメア・テロメラーゼによる老化制御」『老化制御と疾患-エイジング研究の進歩-』, 74(9), pp. 1485-1490, 日本臨床社(2016年9月)

西山 雅祥

「高圧力顕微鏡法によるタンパク質分子機械の回転制御」『高度物理刺激と生体応答』(分担共著) 養賢堂, 印刷中

Nishiyama M. & Arai Y.

Tracking the movement of a single prokaryotic cell at extreme environmental conditions.
Methods in Molecular Biology, Springer, in press.

米田英嗣・野村理朗

「発達障害研究の展望と意義①—生物学的側面を中心に」『必携 発達障害支援ハンドブック』(下山晴彦, 村瀬嘉代子, 森岡正芳編著, pp. 169-172.) 金剛出版(2016年8月)

Lindsay Brown, Bernhard Rauch, Hemant Poudyal

Omega-3 Fatty Acids in Health and Disease, Multidisciplinary Digital Publishing Institute(2016年11月)

センター日誌 (2016年4月1日～2017年3月31日)

2016 (平成28) 年

- | | | | |
|--------------|--|----------------------|---|
| 4月19日 | 2015年度年次報告会 | 11月1日 | 第119回白眉セミナー |
| 5月10日 | 第112回白眉セミナー | 11月15日 | 第120回白眉セミナー |
| 5月17日 | 第113回白眉セミナー | 12月6日 | 第121回白眉セミナー |
| 5月27～
28日 | 第6回白眉合宿 | 12月9日～
10日 | 第7回白眉合宿 |
| 6月21日 | 第114回白眉セミナー | 12月13日 | 運営委員会 (第20回) |
| 6月27日 | シッキム大学ワークショップ報告会 | 12月20日 | 第122回白眉セミナー |
| 6月30日 | 小林圭 特定准教授 離任 | 12月31日 | POUDYAL Hemant 特定助教 離任 |
| 7月5日 | 第115回白眉セミナー | <u>2017 (平成29) 年</u> | |
| 7月19日 | 第116回白眉セミナー | 1月1日 | 堀江真行 特定准教授 着任 |
| 7月31日 | 伯楽会議 | 1月10日 | 第123回白眉セミナー |
| 8月5日 | 運営委員会 (第19回) | 1月16日 | 第8期公募開始 |
| 8月6日 | 白眉の日 | 1月17日 | 第124回白眉セミナー |
| 9月20日 | 第117回白眉セミナー | 2月1日 | 公募説明会 (京都) |
| 9月30日 | 重森正樹 特定准教授
額定其勞 特定助教
DE ZOYSA Menaka 特定助教 離任 | 2月6日 | 公募説明会 (東京) |
| 10月1日 | 第7期白眉研究者11名着任
安藤裕一郎、今吉格、岩尾一史、川中宣太、
高橋雄介、藤原敬介、別所裕介、
吉田昭介 (以上、特定准教授)
磯野優介、金沢篤、金宇大
(以上、特定助教) | 2月7日 | 第125回白眉セミナー |
| 10月18日 | 第118回白眉セミナー | 2月21日 | 第126回白眉セミナー |
| 11月1日 | 第7期白眉研究者2名着任
倉重佑輝、鈴木智子 (以上、特定准教授) | 3月2日 | 第3期離任式 |
| | | 3月31日 | 岩尾一史、小松光、鈴木智子、西山雅祥、
別所裕介、JANSSON Jesper
(以上、特定准教授)
CROYDON Silvia、小石かつら、
齊藤隆之、楯谷智子、中嶋浩平
(以上、特定助教) 離任 |

本誌11号の白眉対談⑩「Truth」への参加者に於いて、
姓名表記に誤りがありました。次の通り訂正してお詫び
申し上げます。

(誤) Marcus Christian

(正) Marcus Christian Werner

『白眉センターだより』第13号

2017年3月31日発行

編集・発行 京都大学白眉センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

TEL: 075-753-5315 FAX: 075-753-5310

Eメール: info@hakubi.kyoto-u.ac.jp

http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/

印刷

株式会社 サンワ

©2017 The Hakubi Center, Kyoto University